

2022 舞台表現クラブ(9/11) 資料

7月から共に実体験を重ねてきて、今回の舞台活動は作品の土台となる部分を、少しやり方を知っている大人と、興味を持っている子どもという関係ではなく、一緒に作る仲間として関わってみたいと感じているということを、伝えておきます。
それで、今日は理論的なことを一緒に考えてみたいと思います。

さて、**確認**です！

毎年行われている「里山ばんざい芸術祭」は、日本の風土の中で生まれてきた風習といった気持ちのいい暮らしのあり方(自然と人、人と人、、、など)を忘れないでいたいということ、そのためには、古に学び・今を歓喜し・未来をそうぞうするといったことを日常生活の中でもたのしむことが大切なのではないか？
それで年に一度みんなで大切なことをたのしく確かめ合う場 = 現代のまつりの場を舞台上に創り出すことを目的としています。



舞台芸術(芸術)の中で作品を創作する時、
多くのものを見、聞き、あじわって感じるといった感覚機能の修練が必要になってくるけれど、
これらの実体験にカタチを持たせるのは心の働きになる。
本当に見えたモノ、聞こえたモノは、自分の心に留まったモノだけれどそれは他者とは共有できない。
芸術的に見るということは、目のする仕事ではなく想像がする仕事と言える。

表現するということは、意思の伝達とも言い換えられる。
単なる感情表現そのものでは、歌は叫びとなり舞踊は飛び跳ねているにすぎなくなる。
まず、伝達しようという意思を認める必要がある。それは、不特定多数の人の前に自ら進み出て自分の考えを伝えるということであり、他者からの反応を求めている申し込みとなる。これは社会的行動と呼ぶ。
舞台芸術での表現は、科学者のような真剣で徹底的な思考の追及と、人間の夢を実現していく想像力の両方が必要。

(長野の若いころの創作ノートMemoより「舞踊創作の理論と実践」)



作品ができていく過程で、ずっと自分はどう感じ、どういう考えをもっているのか？を探し続ける作業(もしかすると本番以降も)であり、また、一緒に一つの作品をつくっていく仲間は、どのように感じ取り、何を考え何を伝えようとしているのか？を汲み取る努力をし続けることが、セリフを間違えないとかミスなく踊るといったことに加えて大切なことになる。

*7月の末、文化政策勉強会という大人の集まりの場で自分の意見を述べた、山本怜依(中3)と倉田三奈帆の両者が、自分の考えを追求していくことは楽しいと言いました。今回は、仲間の中での自分とか、題材をどう解釈するか？ということがありますが、時間をかけて自分自身を追及することは私たちもとても面白い作業だと思うので、いっしょにチャレンジしてみたいと思います。

(伊藤・長野)

【神話と日本人の心：河合隼雄 から、ほんの少し抜粋、数か所わかりやすい言葉にしています】

＝神話の意味＝

(注)左の内容に関係するので紹介しておきます。

天空に輝く太陽を見たとき、どのような民族であれ、その不思議さに心を打たれたことであろう。そして、その重要さも感じたはずである。人間の特徵は、そのような体験を、自分なりに「納得」のゆくこととして言語によって表現し、それを他人と共有しようとするものである。それによって、人と人のつながりができてくる。太陽を太陽という言葉によって共通に認識しているだけでは不十分なのである。言葉が組み合わさって、一つの物語を生み、物語という一つ一つの体験を繋ぎ合わせまとめた内容を共有するのである。そのようにして「世界観」ができあがってくるが、同じ世界観を共有する集団もそれにともなって生まれてくる。

かくして、ある部族はそれが一つの部族としてのまとまりをもつためには、それに特有の物語を共有することが必要になったのである。その部族はどのような世界の中で、どのようにしてできあがり、今後どのようなようになってゆくの、それらを「物語」るものとしての「神話」によって、部族の成員たちは、自分たちの立つ基盤を得、一つのまとまりをもった集団として存続してゆけることになる。

フランスの神話学者デュメジルは、「神話をなくした民族は命をなくす」とまで言っている。つまり、神話はその民族を支える基盤なのである。しかし、現代人の視点から見て、神話のようなデタラメとしか思えないことがどうして、、、といぶかしく思う人もいるかも知れない。太陽が男性か女性かなどという馬鹿げたことを考える必要はない。太陽が灼熱した球体であることは、誰もが知っている事実ではないか、とその人は言うだろう。

古代ギリシャにおいても、太陽が天空に存在する球体であることを人々は知っていた。それにもかかわらず、古代ギリシャにおいて、どうして太陽は黄金の四輪馬車に乗った英雄である、などと信じられたのだろうか？

神話の発生を理解するためのひとつの考えとして、分析心理学者のユングは次のような話を彼の『自伝』の中で語っている。彼は東アフリカのエルゴン山中の住民を訪ね、住民の老酋長が、太陽は神様であるかないかという問いに対して、太陽が昇るとき、それが神様だと説明したのに心を打たれる。ユングは、「私は、人間の魂にははじまりの時から光へのあこがれがあり、原初の暗闇から脱出しようという抑えがたい衝動があったのだということを、理解した。」と述べ、続いて「朝の太陽の生誕は、圧倒的な意味深い体験として、黒人たちの心を打つ。光の来る瞬間が神である。その瞬間が救いを、解放をもたらす。それは瞬間の自分の生き方や考え方に影響する幼少のころの体験であって、太陽は神だといってしまうと、その体験は失われ、忘れられてしまう。」と指摘している。

太陽は神であるかないか、などと考えるのが現代人の特徴である。そうではなく、ユングが「光の来る瞬間が神である」と表現しているように、その瞬間の体験そのものを「神」と呼ぶのである。あるいは、そのような体験を他人に伝えるとき、それは「物語」によって、たとえば、黄金の馬車に乗った英雄の登場としてしか伝えられないのであり、そのような物語が神話と呼ばれるのである。

神話の意味について、哲学者の中村雄二郎は、「科学の知」に対する「神話の知」の必要性としての的確に論じている。「科学の知」の有用性を現代人はよく知っている。それによって、便利で快適な生活を手に入れている。しかし、われわれは科学の知によって、この世のこと、自分のことすべてを理解できるわけではない。「いったい私とは何か。私はどこから来てどこへゆくのか」というような根源的な問いに対して答えてくれるものではない。

中村雄二郎は、「科学の知」は、その方向を歩めば歩むほど対象もそれ自身も細分化していった、対象と私たちとを有機的に結びつけるイメージ的な全体性が対象から失われ、したがって、対象への働きかけもいきおいも部分的なものにならざるをえない。」と述べ、科学の知の特性を明らかにし、それに対して、「神話の知の基礎にあるのは、私たちをとりまく物事とそれから構成されている世界とを宇宙論的に濃密な意味をもったものとしてとらえたいという根源的な欲求」であると指摘している。